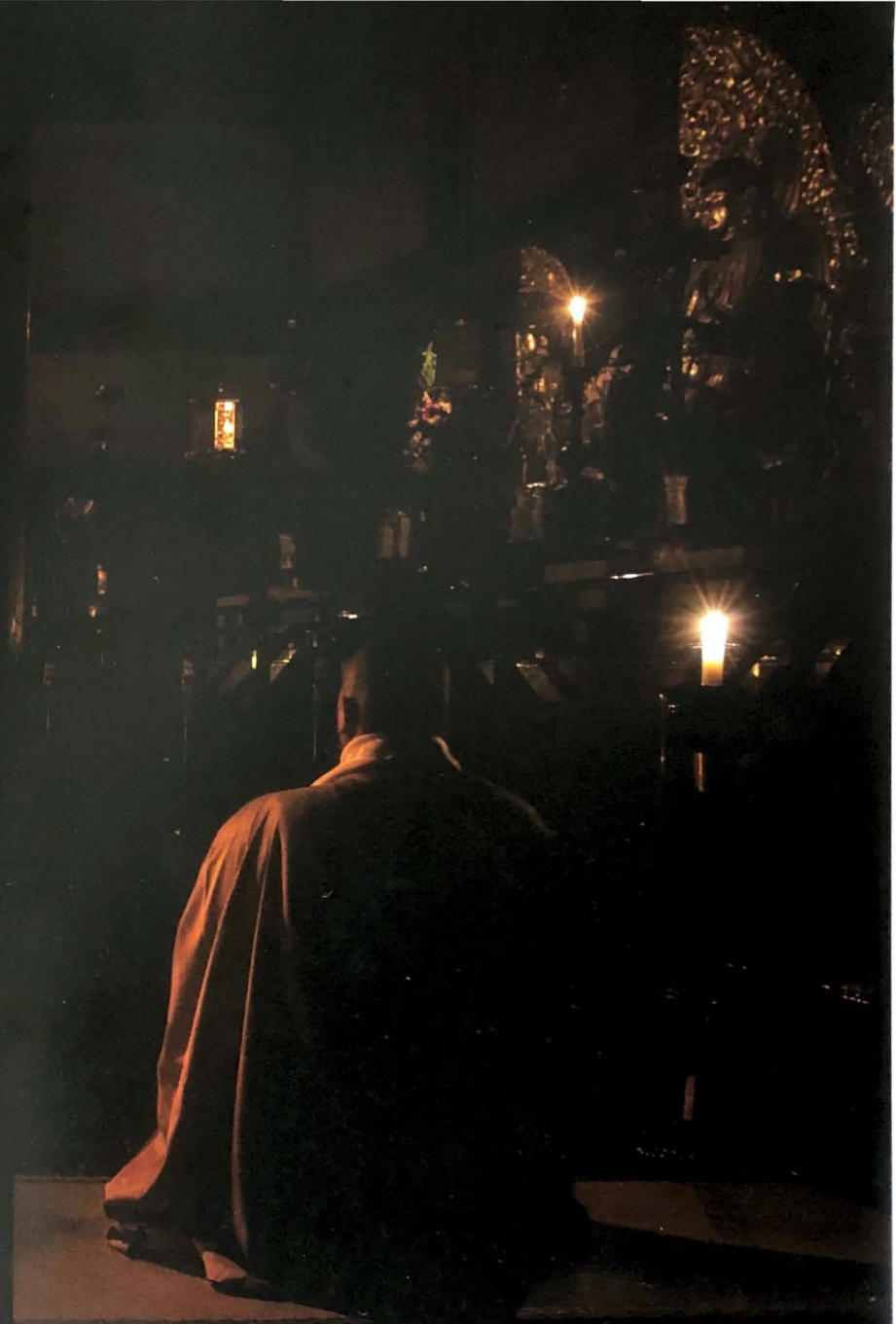


1月の夜が深いつくね、6時30分、御所の
のりだけだけの御室・金堂に、参行(ごんぎ
ょう)の音が響く。右に鎮座するのは本尊阿
彌陀三尊像、「松林庵」と、通称の御坊(御室
金堂)に参詣した人のみが参加できる。



仁和寺文化体験プログラム(京都・御室)
世界遺産で過ごす一夜

寺社で
目覚める
旅

撮影 喜多 章

暗いうちに境内の宿舎を出た。静寂な妙利の道を朝の動行に向かう。ふと見上げると晩の明星がまたいた。そして正面には月が。二日前満月だったのに、もうレモンの形に欠けている。長いまっすぐな道を歩いて石段をのぼり正面の金堂に着く。1640年頃、京都御所から移築されたものだ。中は蠟燭がいくつかが灯されただけ、暗い中で動行が始まる。テノールの声、パスの音が混ざり合って真言宗のお経が読まれていく。心の中のわだかまりがほどこいていった。

全国の寺も助ける100万円

京都の東北にある仁和寺を訪ねた。「徒然草」に「仁和寺にある法師」で始まる段があることは知っていたが、これまで拝観したことはなかった。境内の古民家を改修して1泊100万円の宿「松林庵」をつくったと聞き、びっくりして見に行ったのだ。

宿になったのは久富家というこの仁和寺の寺侍、財産管理と寺医も兼ねた人の二階家。久富家は寺の興隆のため時の門跡を助け、裏山の成就山に御室八十八ヶ所を設けた功労者で、昭和13年に子孫からこの建物を寄贈された。見せていただく、ぶんと新しい畳と木の匂い。長押の細さなどから見る

と質実な民家で、建てられたのはおそらく江戸ではないかと思う。

裕福なお寺が境内に裕福な人を泊めてまた収益を上げる計画が、そんな先入観を持っていた。そうではない。財務部管理課、拝観課の金崎義真さんの説明は明快だった。

「京都には1700近い寺があり、境内にたくさん建物が立っています。寺はその文化財の維持・修復に苦しんでいます。もちろん国宝や重要文化財などの指定文化財には修復費用はある程度出ますが、寺は自立の道を探らなければいけないと思ってきました」

仁和寺は世界遺産「古都京都の文化遺産」の構成要件をなすが、清水寺の拝観者が300万人に対して、その十分の一ほど。寛永期の建物が多いとすれば同じ頃に改修が必要となるだろう。自分の家の水まわりや玄関ドアを直すのも億劫な私には、この広い境内に散在する文化財を次々修復していく苦労は想像を絶した。その費用捻出を税金に頼らず、宿坊の活用により少しでも自ら生み出していくのは応援したい。

「ちょうどそこに日本財団から『いろはにほん』計画の一環として、境内の空き家を改修して宿泊施設にしませんか、という提案をいただきました。修復費用は日本財団が1億2000万円、寺は3000万円ほど出しました。旅

館業法で定められている登録をし、税金も払っていきます。収益の8割をうちがいたしていきます。堂塔伽藍の修復に使います。残り2割は日本財団経由で全国のお寺の文化財保全に使うというので、他のお寺も助けることができる。そこがいちばんの魅力でした」

素晴らしいではないか。100万円のの中に含まれているのは、松林庵に泊まることだけでなく、拝観終了後から翌朝の開門までの仁和寺の御殿の使用。雅楽でも声明でも月見でも楽しめる。天皇が使った重要文化財の茶室でホットウスイスキーを味わったりもできる。これはかなりの特典ではなからうか。

昨年7月にこのプログラムができてから、カナダ人、フランス人、アメリカ人、日本人など数組の家族がこの家に泊まった。みんな満足して帰ったという。富裕層にとっては10万だろが100万だろが大差はない。また宿泊費が文化財を守るのに役立つとすれば嬉しいという。ある日本人客は「今まで無我夢中で働き、会社を一部上場させ、文化も余暇もなかった。これからの人生はこういうことにお金を使いたい」と感想をもらしたそう。

歴史と自分につながる体験

朝の動行の時の法話も面白かった。

されていない。これからいわば寺宝の目録をつくり、寺のストーリーを伝えていきたい」という。

松林庵についても「収益ではなく、あくまで日本文化に関心を持つお客さまに寺という環境、日本文化を味わっていただくこと。だから心を込めて準備したい。まあ月に3、4組お泊めするのが限界かな。それでいいと思っています」。それだけ受け入れたら、年間5000万円近い収入になる。自己

「ここで修行した時は、自炊して、朝から晩までお勤めばかりでした。友人からの手紙も1年間の修行が終わった時に渡された。寺を出て初めて山口百恵さんが引退したのを知りました。今もスマホを持って持っていたら即退去です。寺の暮らしがわかって新鮮だ」

さらに、通常は宿泊者だけが体験できる特別拝観へ。大石隆淳、財務部長が法衣姿で案内してくださった。「開基の宇多天皇は光孝天皇の御子ですが、いったん臣籍に降下して源定省と言いました。父の死去により皇族に復帰、宇多天皇になりました。寛平9年(897)、31歳で醍醐天皇に譲位して仏門に入り、法皇となられ、ここに

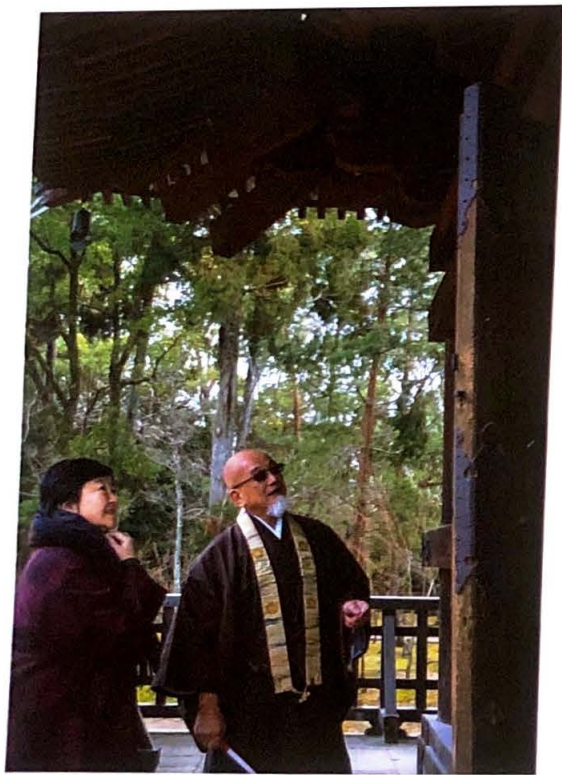
住まわれました。皇族の場合、住職ではなく門跡と呼びますね。ここは書や和歌など当時の文化センターになりました。源平時代の寺宝には、高倉天皇が皇子、のちの安德天皇が生まれて喜んでいてという書状もあります。宸筆(天皇の直筆)の方は国宝。写しも重要文化財です」

「応仁の乱で堂塔伽藍はいったん焼けたんです。その時に平安時代の阿弥陀三尊などは誰かが背負って逃げて前の双ヶ丘に隠したそうです。織田信長から寺の所領を安堵するという書状もある。江戸時代、三代將軍家光が上洛した後に幕府から20万両というお金をも

Mayumi Mori
作家、市民運動家。1954年東京都生まれ。84年に地域雑誌「谷中 横津 千駄木」を創刊。2009年の最終号まで編集人を務める。98年「鶴外の虎」で芸術選奨文部大臣新人賞。03年「即興詩人」のイタリアでJTB紀行文学大賞。14年「青龍の冒険」で衆議院文学賞を受賞。その他、著書多数。歴史的建造物の保存活動にも取り組む。

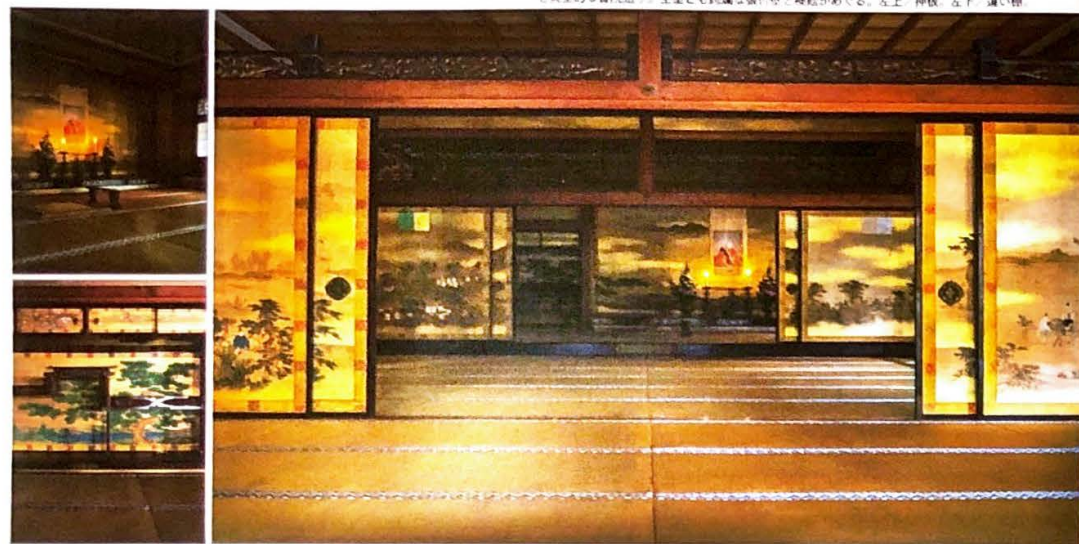
歴史好きにはこたえられない話ばかりが続く。金堂から経蔵へ向かう。「この経蔵も寛永年間(1644)の建立。こも階の手すりを開けて入る。五重塔の中はなかなか見る機会がない。心柱は基礎石の上に少しだけ浮いている。これが塔の地震にも倒れない構造だ。『西側の大日如来を中心としたこの仏像の並び方は、胎蔵界と言います』」

真言宗は空海が始めた密教の宗派だが、その中にも18派あり、お経の読み



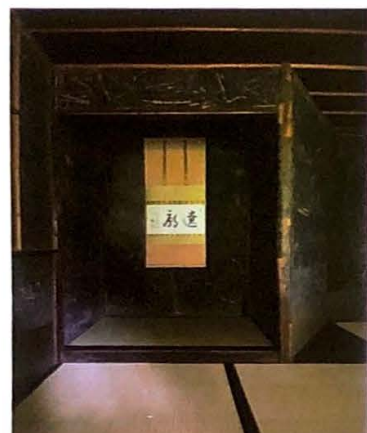
時折、小雪が舞った寒い日。五重塔の扉の前で話した大石隆淳財務部長(右)と森まゆみさん。

閉門後の御殿で自由を楽しむ



宸殿 しんでん

庭にのびて和室は建物のほとんどを失うが、その約160年後に再興した。その頃に御所の常設館(つねごてん)が下賜されたのが宸殿であり、当時は正殿という位置づけだった。ところが1887年に焼失。現在の建物は1914年に、亀岡末吉の設計で再建されたもの。入母屋で輪窓(むわだ)の寝殿造り。内部には書院造りが採り入れられる。上・上段の間、二の間、三の間の3室からなる。上段の間は折上格天井。押板、違い棚、付け書院、機軸横と典型的な書院造り。全室とも銘欄や張付壁と縁起がめぐる。左上・押板。左下・違い棚。



連廊亭 りうりょうてい

庭形光華の好みと伝えられ、二重半台目の「我前庵(がぜんあん)」に四畳半の小書院。水屋の間などで構成された茶室。上「我前庵」は、点前座を約半畳分狭くして、点前座前に半畳を入れている。茶室口から茶座への動線を確保するために床の間の縁の壁を斜めにし、床は三角形の板張り(縁板)に、砂は向切(もこうぎり)。その前に花縁形に開けた板壁と中柱が立つ。光華が国産茶室「如庵(じょあん)」を夢見たとされる。下「外観」。柳やななれ(むくろ)のある書院で、格(こけら)書きの屋根が載る。写真は裏縁のめぐる小書院側から。



飛海亭 ひうかい

江戸時代末期に普請された茶室で、光格天皇の遺愛と伝承される。四畳半の茶室に半間幅の水屋と台所が付属する。昭和12年に重要文化財に指定されている。上・床の間は土壁を塗りまわした欄干形式で踏み込み床となっている。その右手には円窓の下地窓。天井は真行草と3つの窓。客座の床前が杉板(へぎ)の納代張り。勾配が強い化粧瓦葺の茶室の客座。点前座が満張りの白竹障子。下・西側外観。屋根は入母屋で墨屋葺きとなっている。障子は貴人口(きにんぐち)で、開けると床の間正面とみえる。



改修は庭づくりから

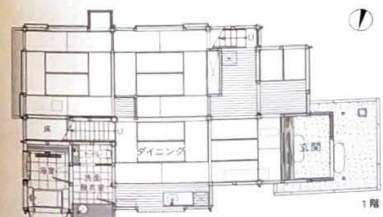
規制できない地盤条件なので、基礎をコンクリートで固めてから改修した。築山からつくれたという庭は、真地に生える草木のように植栽。これからのように育っていくのも楽しみだ。

寺侍の屋敷だった数寄屋建築を改修

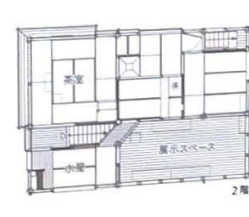
松林庵に宿泊

現代の暮らしに合わせた快適な宿泊空間

上右・1日1組、5名まで。好きな場所に布団を敷いて休むことができる。障子は天保元年創業のウタのもの。右のガラスケースにはゲストの好みに合わせて仁和寺の所蔵品を展示する。文机に置いた茶碗は京都の陶芸家、守崎正洋による。そのほか、京司よしあきの産物、山長書「香のカタログ」一冊の文箱、京都美術工芸大学の所蔵品など、京都ならではの工芸品があらわるところに、下右の建物の面白さもそのまま残している。上左・2階の2畳の和室は床まわりも天井も数寄屋らしい素材づくり。下左・2階の茶室。ハンス・J・ウェグナーのCH22に座る。庭がよく見える「ラグジュアリーホテルに比べたら、バスルームもトイレも1つしかない。シンプルな宿泊空間ですが、この場所に泊まることの豊かさを感じてほしいです」と、松林庵の副オーナーの矢倉様子さん。

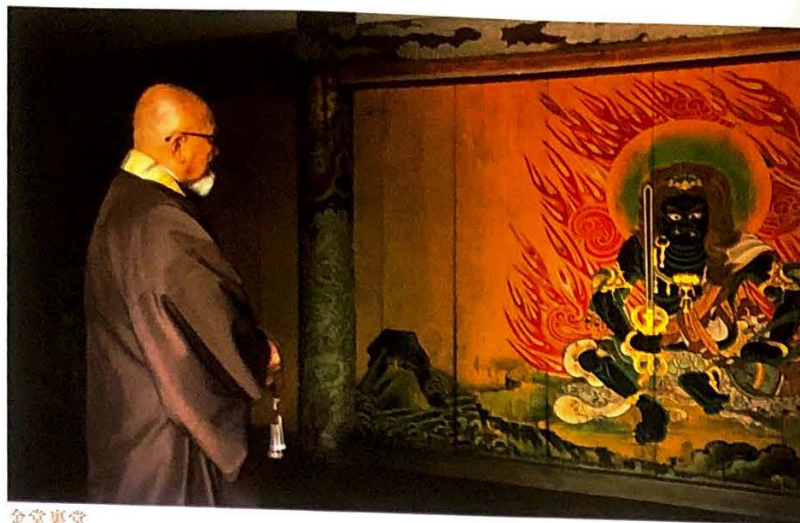


平面図 1/250



DATA
松林庵
所在地 京都市右京区御室大内33
仁和寺内
延床面積 159.97㎡
構造・規模 木造2階建て
改修竣工 2017年9月
建物改修工事 住友林業チームアップ
造園工事 住友林業緑化
工事内容 屋根瓦交換・破損部分修理、耐震補強、浴室・脱衣所・洗面所新設、玄関増築、機・建具・装飾品整備、修景工事、造成工事、数寄屋門新設
総事業費 ¥156,734,520

金堂、経蔵、五重塔など非公開の空間を巡る
僧侶とともに特別拝観



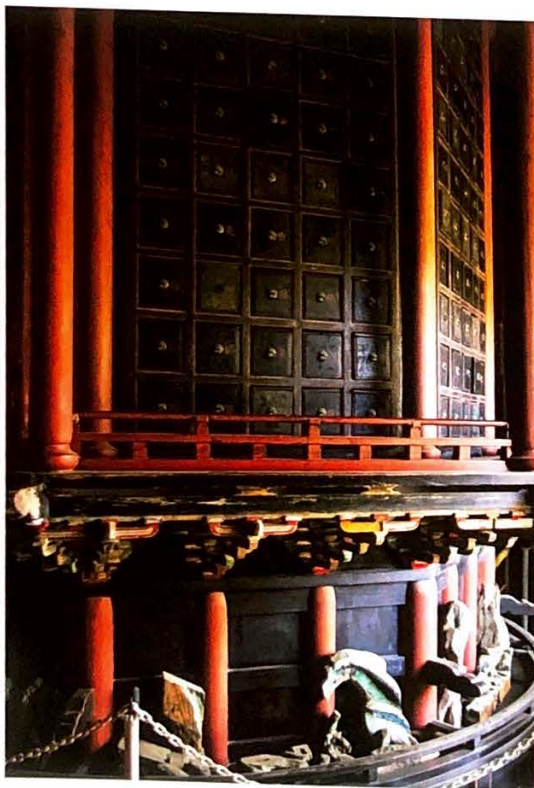
金堂裏堂

金堂裏堂（しゃみだん）背面の五大明王壁画。京都御所より移築されてからの372年間、非公開だったため、ほとんど傷みや色あせがない鮮やかな美しい状態で残っている。写真は不動明王。



経蔵 きょうぞう

八角形の回転式の輪蔵が設けられた経蔵。寛永年間造。重要文化財。右の1面に96、8面に768巻の引き出しがある。そこに天海版一切経（6323巻）が納められていて、回転させることですべての経典を眺められたという。左上、建物は正方形で、床は全面瓦敷き。扉には扉付きの棧戸を立て、両脇には花頭窓がつくなど、禅宗様の特徴をもつ。左下、特別に経箱を開けてくださった。このように、一つひとつにお経が入っている。経蔵および金堂の内部は3月18日（月）まで一般に特別公開されているが、こんな体験は特別拝観ならでは。



動行後の法話

動行が終わると、空が白み始めていた。明るい光を受けながら仁和寺についてのお話を聞く。たとえば「宇多法皇の住まいを御室といい、それがこの地名にもなっています。オムロンという体温計で有名な会社をご存知でしょう。ここが御室の地で、社を挙げて仁和寺の支援者です」。なるほど！と思うことばかり。



国宝建築で特別な宗教体験
金堂での朝動行

境内で臨む朝日の光

右上ノ国宝、金堂。入母屋造り。本五重き。桁行7間、梁間5間。桃山時代の建築で寛永年間、京都御所より仁和寺に移築された。正面はすべて半間（はじとみ）。妻壁は大虹梁（こうりょう）上に大基段（かえるまた）と両側に大熱束（たいへいつか）を立て、二重虹梁を載せるなど、紫雲殿の外観をほとんど残す。門跡寺院らしい佇まい。右下ノ金堂を後にした午前7時頃、朝日がのぼり始めた。左は五重塔。左ノ動行後の僧侶が歩く姿も美しく、印象的だった。手前は中門、奥に見えるのが二王門。





使用材料: コミュニケーションタフ 防音クオーク(クリア) > ナチュラル化粧(無垢材) 防音: 防音会社イリア 防音測定

WPCフローリング

コミュニケーションタフ 防音

上質な空間に求められる、静けさと美しさ。DAIKENは、独自の加工技術により防音性能を高めた、高級感あふれる天然木化粧の床材を実現しました。スプーンを落とす。ハイヒールで歩く。そうしたときに出る軽重床衝撃音を効果的に軽減。耐久性にも優れ、土足歩行に対応します。

木に「硬さ」という、性能を。

公共・商業施設向けショールーム

DAIKEN 秋葉原テクニカルスペース

技術や素材、製品展示のほかに、原寸大で仕上がりやコーディネートを確認できるシミュレーションスペースなどを備えた、予約制のショールームです。

〒101-8950 東京都千代田区外神田3-12-8 住友不動産秋葉原ビル3F
開館時間: 平日10:00-17:00 予約制



(資料請求番号 0008)

キノウを超える、ミライへ
DAIKEN

静謐と美の宿る床。



大建工業株式会社

DAIKENとつくる公共・商業施設
<https://www.daiken.jp/product/contents/building/>

お問い合わせ先

市場開発部 TEL:03-6271-7873
market-development@daiken.co.jp

DATA
松林庵での宿泊を含む文化体験プログラムは1日1
組限定。利用料は1組100万円(税別。料理や体
験などにかかる費用は別料金)。プログラムの内容
は、すべてリクエストに合わせたオーダーメイド。
真言宗御室派 総本山 仁和寺
tel 075-461-1155 <http://www.ninnaji.jp>

五重塔

寛永21年建立と伝えられている五重塔。総高36.18m。重要文化財。柱の上の廻物は簡素な三手先(みてさき)。経蔵や観音堂が禪宗様なものに対し、墓殿などに彫物装飾をしない平安時代からの和様を踏襲している。通常は非公開。下五重塔初層の内観。折上格天井には、門跡寺院らしく菊花文を描いている。東に立つ塔内には胎藏界の諸仏が。須弥壇中央には四方を板で囲う心柱が立つため、本来ここに坐すべき大日如来像は西側正面。礼拝者の前に安置される。写真は北の天鼓雷音如来。右「四天王柱」には極彩色であったろう諸仏が描かれる。

